

“クリティカル・シンキング”の育成 (1)

—中学生向け教授法の開発—

○池田まさみ¹・安藤玲子²

(¹お茶の水女子大学人間発達教育研究センター・²金城学院大学人間科学部)

キーワード: クリティカル・シンキング、コミュニケーション、メタ認知

Development of the Critical thinking education for Junior high school students

Masami IKEDA¹ and Reiko ANDO²

(¹Ochanomizu Research Center for Human Development and Education, Faculty of Human Sciences, Kinjo Gakuin Univ.²)

Key words: Critical thinking, communication, metacognition

目 的

クリティカル・シンキングとは、一般に、適切な基準や根拠に基づき、論理的で偏りのない思考のことを指す。情報のやりとりのなかで、誤解や直感によるリスクを減らし、スムーズでより豊かなコミュニケーションを実現するためには、早期からのクリティカル・シンキング教育が重要である。しかし、日本では高等教育において扱われることが多く、初等・中等教育ではあまり進んでいないのが現状である。

本研究は、児童・生徒のクリティカル・シンキングの育成に関して、(1)教授法開発、(2)尺度開発、(3)教材開発を目的とした3年計画の縦断研究である。研究初年度は、中学生向けの教授法と尺度の開発に向けて授業と調査を実施した。本稿では、授業を担当した現場教師のふりかえりを中心に、授業の成果と課題を整理し、教授法の展開について検討する。

方 法

授業の対象者と実施時期 関東地方の公立中学校1年生118名 (男子:63名、女子:55名)。授業は各学期4回の計12回実施。

授業の位置づけと授業検討会 授業は中学校と大学の連携講座という位置づけのもと「グローバル・コミュニケーション」と題して、総合学習の時間を利用して行われた。授業内容に関して、教師と事前に検討会を開き、また年度末には、総括(反省会)として、授業を担当した教師にインタビューを行った。

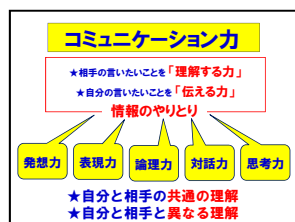
授業のねらい クリティカル・シンキングを育むの最初のステップは、コミュニケーションという他者との関係性のなかで、まず「自分を知る」ということである。具体的には、生徒に「自分の思考を思考する(メタ認知)」ための思考課題(トレーニング)を設定した。主な内容は以下の通りである。

ガイダンスーグローバル・コミュニケーションとは

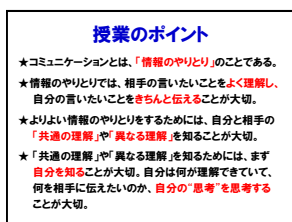
- ・コミュニケーションに求められる力 (ガイダンス資料1)
- ・授業のポイント (ガイダンス資料2)

思考トレーニングー発想力・表現力を中心に

- ・与えられた情報から、自分の考えやイメージを表現する
- ・表現を通して自分と他者の考え方の共通点と違いに気づく
- ・実践的な問題を通して、自分の考え方のクセに気づく
- ・マインド・マップの作成を通して、自分の考え方に気づく



ガイダンス資料1



ガイダンス資料2

手続き 授業は、総合学習の時間 (50分×2コマ) に、クラスごとに、同時に同じ内容を実施した。担任、副担任、著者ら5名のなかから3名が主担当した。担当者は、回ごとにクラスを入れ替わり、連続して同じクラスに入ることはなかった。各授業では、設定された思考課題について、ワークシートを用いて、(1)考える→(2)書く→(3)気づきと解説→(4)考える→(5)書く→(6)発表する→(7)気づきと解説→(8)ふりかえり、というパターンが基本であった。生徒のワークシートは、「ポートフォリオ」 (=思考アルバム) として積み重ねられた。各授業後のふりかえりでは、生徒から、感想 (自由記述) と同時に、その日の授業での自分の「態度」「知識」「技術」「表現」「理解」の度合について、5段階評価を得た。

効果測定および尺度開発のための調査 2009年6月、11月、2010年3月の計3回実施。尺度開発については、本学会大会の別稿「“クリティカル・シンキング”育成(2)」を参照のこと。

結果と考察

授業の改善点を見極める必要性から、本稿では、著者を除く授業を担当した教師4名 [(A)国語・教歴27年、(B)社会・教歴11年、(C)数学・教歴3年、(D)数学・教歴1年] のインタビューに基づいて、主な意見等を以下に整理しておく。

生徒の変化について

自分の考えの「思い込み」に気づき、「しなやかに考える」「もっと視野を広げる」必要があると思った生徒がいた。(A) しっかり出来ている生徒は発言などが良くなった。(B) 「人と自分の気持ちを共有できるのは気持ちがいい」と、自分と他者の共通点と違いに気づき、それを受け入れようとしている。(D)

授業を担当してみて

コミュニケーションには訓練が必要なことを気づかせることが出来た。また教師も予習をしてみて初めて分かったことがある。(A) 自分のことを考えるのは難しい、思春期の生徒にとって自分自身を知ろうとすることの大変さに気づいた。(B) 同じことでも何度も考えを出すことができる。要点をおさえて文を書いたり説明する力は今後に活かせるものなので良かった。(C) 生徒の課題を出せた。分からない、自分と向き合うなど。(D)

問題点や改善点など

集中できない、考えるまでに至らない生徒にどう対応するか。(C) 言葉に限らない活動の多様性を考えてはどうか。(A)

今後の課題 総じて、授業の意義や成果は認められたものの、学習意欲や思考課題によっては、生徒の取り組みに差が生じた。中学生では、「自分を知る」ことへの抵抗が見られることがあるが、それが学習のねらいと明確に結びつくことでスムーズに取り組めるようになった生徒も多く、今後抵抗の強い生徒にもその意味が見い出せるような工夫や課題の設定が必

池田まさみ・安藤玲子（2010.9）クリティカル・シンキングの育成（1）—中学生向け教授法の開発—日本心理学会第74回大会（大阪大学）論文集, 1189.

要である。また、教師は事前に課題の理解を深めておくこと、教師間でも情報を共有しておくことで、生徒から様々な思考を引き出す効果的な授業が展開できると思われる。